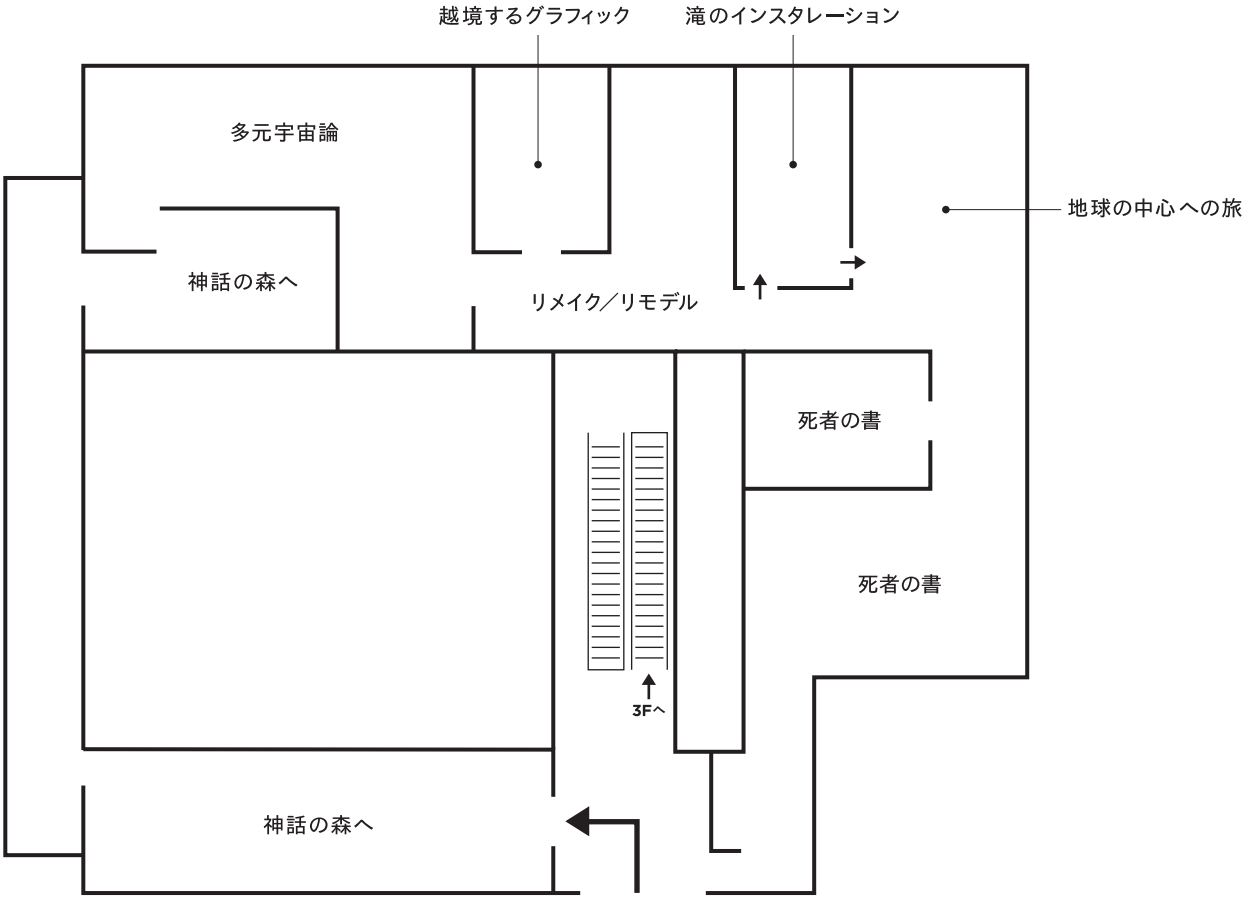
GENKYO 横尾忠則
原郷から幻境へ、そして現況は?

MUSEUM OF CONTEMPORARY ART TOKYO
東京都現代美術館

2021年7月17日(土)ー10月17日(日)

展覧会ガイド

1F



神話の森へ

横尾忠則は、1980年夏にニューヨーク近代美術館でピカソの大回顧展を見たことをきっかけに、活動領域をグラフィック・デザインから絵画へと移しました。横尾のいわゆる「画家宣言」は、そのような近況を伝えた、当時の記事の見出しから生まれた言葉で、横尾自身の宣言文があるわけではありません。1980年代を通じて横尾は、国際的な新表現主義の動向を同時代的に体感しつつ、自らの絵画を見出そうと試行錯誤を重ねます。森の中の裸体を描いて絵画の身体性を追求した作品や、日本神話を主題にした作品、鏡、電飾、鳥の骨、剥製などのさまざまな異物をコラージュした作品を、次々と発表し、国際的にも注目されました。

多元宇宙論

カンヴァスの上にカンヴァスを貼り付けた「カンヴァス・オン・カンヴァス」に始まる、いわゆる「多次元絵画」では、美術史や映画など、さまざまな源泉から引用されたイメージが、複雑に組み合わされ、コラージュされています。映画的な時間性やストーリー・テリングを導入した「引用の織物」とも言えるこれらの作品は、横尾独自のポストモダン絵画の到達点と言えるでしょう。やがて横尾の関心は、夢からテーマがもたらされた滝の絵画や、画家のインスピレーションを表現した受胎告知の連作など、自分自身の深層へと移っていくことになります。

リメイク／リモデル

1966年の絵画による最初の個展で、横尾はあっけらかんとした無作法な現代女性（当時の言葉で言えば、「アプレ（ゲール）娘」）を描いた挑発的な絵画連作を発表しました。「ピンク・ガールズ」とも呼ばれるこれらの作品を、横尾は、2000年代以降に、さまざまな反復／変換作品としてリメイクしています。反復は、横尾が折に触れて実践してきた手法であり、横尾芸術の重要な特徴の一つです。1967年に最初の5点が描かれ、やはり 2000年代以降に描き継がれているアンリ・ルソーの絵画の一連の「変換」作品からは、日常の中から幻想と詩情を紡ぎ出した「日曜画家」への、時空を超えた深い共感をうかがうことができます。

越境するグラフィック

輸出用のマッチのラベルなどに由来する土俗的なモティーフや鮮やかでポップな色彩など、さまざまな出自をもつ要素を強引に寄せ集め、モダンデザインに対して叛旗を翻した1960年代の横尾のグラフィック作品は、1967年にはニューヨーク近代美術館に収蔵されるなど、早くから国際的にも高く評価されました。デザインにおけるポストモダンの先駆であり、またデザイン自体や商業主義に対する批評性を内在させていたとも見ることができます。プロセスの提示や、ユートピア的な自然の中の裸体のイメージは、画家転向以降にも横尾が探求を続けているテーマです。

滝のインスタレーション

横尾は、滝の絵画を制作するための資料として、世界の滝の絵葉書を集め始めますが、それは当初の意図を超え、13,000枚余りという膨大な数に達しました。大量の絵葉書に一種の神秘的な力を感じ、その「供養」として制作されたのが《滝のインスタレーション》です。滝は、霊的な浄化力を持つものとして、古くから信仰の対象でした。絵葉書は、たんなるイメージにとどまらず、メッセージをもたらす手段でもあります。滝の絵葉書の奔流を体感することは、ある意味で宇宙的な力に身をさらす体験にほかならないのではないでしょうか。

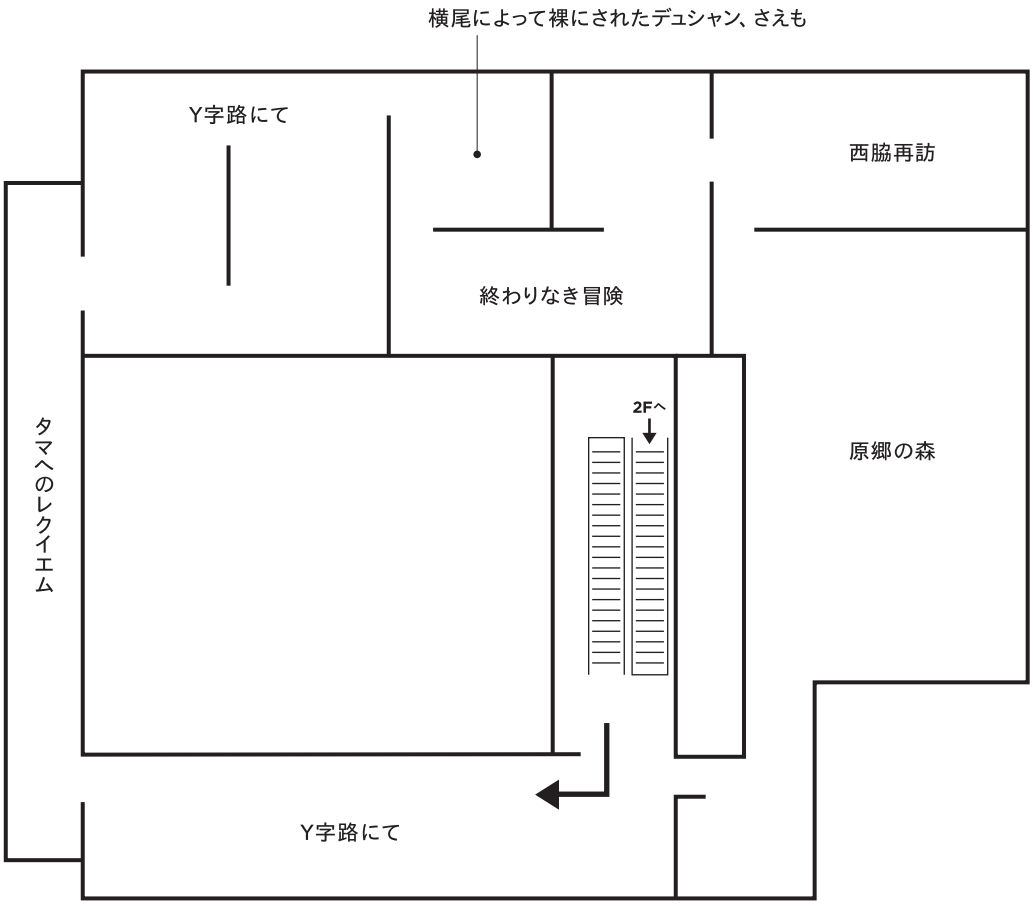
地球の中心への旅

滝のテーマ以降、横尾の眼差しは、一転して自分自身の内面と記憶へとむけられるようになり、ターザン映画、江戸川乱歩の探偵小説、南洋一郎の冒険小説、山川惣治の絵物語、講談社の絵本など、幼少年期に親しんだ、血湧き肉躍る冒険が主役となります。それとともに作品のスタイルも、夢の時空間を現出させたような、説話的なストーリー・テリングが展開されるマジック・リアリズム的なものに変化しました。横尾は、芸術家にとって、インファンテリズム（幼児性）は欠くことのできない資質であると述べています。

死者の書

横尾は、早くから死に関心を抱き、作品のテーマとしてきました。郷里の兵庫県西脇市で過ごした少年時代の記憶は、養父母をはじめとする死者たちとの交歓であるとともに、戦争の記憶にもつながります。少年の日の横尾は、山の端の彼方の夜空が、空襲で真っ赤に染まるのを目撃しました。赤の絵画の連作は、この記憶を通じて死者たちの世界に結びつくと同時に、宇宙や、さらには輪廻転生をも表現しています。一方、顔を見せない女性たちを描いた連作は、「見えないこと」を描くことで、死を暗示しているのかもしれません。

3F



Y字路にて

横尾の代表作「Y字路」シリーズは、子どもの頃にかよった模型屋が取り壊された跡地を撮った写真に、個人的なノスタルジーを超えた普遍性を感じたことをきっかけに生まれました。懐かしさとよそよそしさとを併せ持つ、時代に置き忘れられたかのような岐れ路を目にして、私たちはY字路の力学に引き込まれてしまいます。昼間のY字路、黒いY字路など、さまざまなヴァリエーションも描かれており、Y字路のモティーフは、横尾にとって絵画のためのマトリクスの役割を果たしていると言えるかもしれません。オーロラ・シリーズの1点には「何を描くかでも、どう描くかでもなく、如何に生きるかだ」と書き込まれています。この作品をターニングポイントとして、横尾は、いかに生きるかを絵画的実践の本質ととらえ直した、新しい段階に入っていきます。

タマへのレクイエム

タマは、横尾が15年間生を共にした愛猫でした。目の前で生を終えようとしているタマをスケッチ的に描いた2点の作品によって始まる連作は、在りし日の飼い猫のさまざまな姿態を、写真などに基づいて描出したものです。てらいのない「日曜画家」的な筆致で、タマの姿を思い出しながら、一枚一枚、丁寧に描いていく行為は、まさに鎮魂の儀式と呼ぶにふさわしいものだったことでしょう。横尾は、描くことによって、失われたタマを再＝現前させよう、蘇らせようとしているのかもしれません。その意味でこの連作は、絵画の根源に通じるものでもあるのです。

横尾によって裸にされたデュシャン、さえも

マルセル・デュシャン（1887-1968）は、便器をそのまま芸術作品として提示しようと企てた《泉》（1917年）などのレディメイド（既製品）のオブジェによって知られ、コンセプチュアル・アート（概念芸術）の祖と言われる20世紀の巨匠です。絵画を否定したと言われるデュシャンに対し、横尾は、とくに2000年代に入ってから、デュシャン作品の細部を絵画の中に引用する、一種の戯れを、繰り返し仕掛けています。現代美術におけるデュシャン的なアートの逆を衝く横尾のアプローチは、まさに反時代的です。しかし、この「反時代的であること」こそが、まさしくデュシャン自身のアプローチの本質にあるものです。もっともデュシャンから遠く見える横尾が、じつはもっともデュシャン的であるのかもしれません。

終わりなき冒険

Y字路シリーズを断続的に描き続けるかたわら、横尾は、さまざまなきっかけから、種々のテーマによる連作を描いています。銭湯シリーズや温泉シリーズからは、横尾の絵画のヴァリエーションの豊富さをうかがい知ることができるでしょう。冒険や芸術家は、横尾が以前から繰り返し取り上げてきたテーマですが、新たな視点から取り組むことで、集大成的な作品が生まれています。水の波紋の連作では、金沢21世紀美術館に設置されているレアンドロ・エルリッヒの《スイミング・プール》をモティーフに、抽象絵画と具象絵画の共存や、絵画の中の文字というテーマが探求されています。このような多元的な展開が示しているように、まさに横尾の絵画的企てこそが「終わりなき冒険」にほかならないのです。

西脇再訪

横尾は、1996年、2017年、2018年の3回にわたり、郷里・西脇市の近傍にある杉原紙研究所（兵庫県多可郡多可町）で、和紙の紙漉きの手法による一種のコラージュ作品を制作しました。横尾の「紙漉きコラージュ」作品には、輸出用の綿織物（播州織）のラベルやハギレ、B-29爆撃機の写真など、横尾が19歳までを過ごした西脇の街に関係が深いものが取り集められています。それらが呼び覚ます記憶や感情は、横尾にとって、創造の本質をなす重要なものです。「紙漉きコラージュ」は、その一端を明かしてくれる、一種の標本箱ではないでしょうか。

原郷の森

近年の横尾の作風の変化の底流にあるのは、抽象性と具象性の統合であり、また絵画の「肉体化」です。スケッチ風のストロークによって組み立てられた色彩豊かな画面は、何かのイメージが形をとる瞬間を捉えたかのような、初発的で自律的な絵画性を示しています。最新の連作のテーマである「寒山拾得」は、中国・唐時代の伝説的な人物で、中国及び日本で、禅宗との関わりにおいてしばしば言及され、水墨画や文人画の画題としてもさまざまに描かれており、脱俗の理想を体現しています。横尾が到達した、新たな自由の境地。震えるような筆触によって、明るく生動する色彩空間の中から現れる、聖なる愚者たちのおぼろげな姿は、まさに絵画の自由そのものと言えるのではないでしょうか。

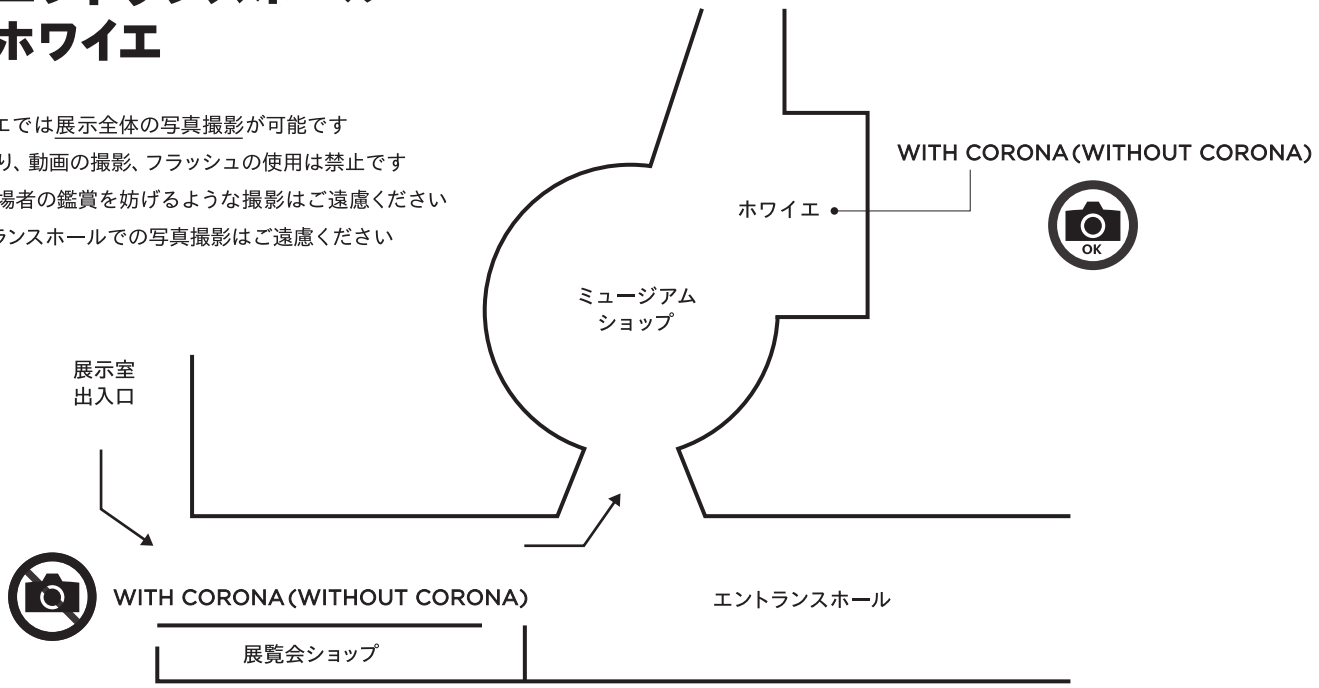
2F

アーカイヴ

横尾の作品の中で、現存する最も古いものが、5歳の時に講談社の絵本『宮本武蔵』の挿絵を描き写したなかの1枚、巌流島の決闘の情景を描いた《武蔵と小次郎（模写）》ですが、原画の下端で切れていた小次郎の両足首から先が、同じ絵本の他のページの他の人物の足を写して、描き足されています。つまり、模写とコラージュという、横尾の芸術を特徴づけている二つの重要な要素が、早くも出現しているのです。《岩と水》は高校生の時に描かれた最初の油絵の一点で、砂を混ぜたというマティエールや、キュビスム的なモティーフの処理、暗色調の色彩は、高校生が描いたとは思われない完成度を示しています。滝の絵という意味でも、予見的な作品です。高校卒業の前後に、ポスターのコンクールに入選して採用されたのが、《織物祭（西脇市）》で、この作品をきっかけにデザイナーへの道が拓けることになりました。

1F エントランスホール ホワイエ

- ホワイエでは展示全体の写真撮影が可能です
- 一点撮り、動画の撮影、フラッシュの使用は禁止です
- 他の来場者の鑑賞を妨げるような撮影はご遠慮ください
- エントランスホールでの写真撮影はご遠慮ください



WITH CORONA（WITHOUT CORONA）

2020年5月、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、横尾は、自身の作品や写真を中心に、テレビや新聞のニュースのほか、さまざまなイメージを素材として、マスクをコラージュした「WITH CORONA」シリーズを、Twitter、Facebook、およびブログを通じ、世界に向けて発信し始めました（2021年4月からは「WITHOUT CORONA」に名称を変更）。2021年7月現在、その数は約700点に達しており、いまなお毎日増え続けています。マスクによって作品が完成した、と横尾は述べましたが、マスクをコラージュされたイメージは、意味や雰囲気を一変させ、見る者にさまざまなことを考えさせます。それは、コロナ禍という未曾有の状況にある私たちの現在を映すものと言えるかもしれません。

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館、朝日新聞社、テレビ朝日、文化庁、独立行政法人日本芸術文化振興会
特別協力：横尾忠則現代美術館、国立国際美術館、カルティエ現代美術財団
協賛：凸版印刷

テキスト：南雄介（本展企画監修）

出品作品リストは
右記QRコードより
ご覧いただけます